



▲コアジサシ(小鰆刺) チドリ目 カモメ科
体長28cm、夏鳥
2011年6月20日=木更津市 筆者撮影

毎年、川岸の桜やヤナギの木が緑色に色づき始め、アユの幼魚が遡ってくる頃、上総の川にもコアジサシがやってくる。彼らは川面から数メートル上空の一点にとどまり、急降下して小魚をとらえて、下流へ飛び去っていく。そよ風の中で、真っ白な姿を見ると「今年も良い時節になった」とうきうきした気持ちになる。

その数は一~二羽であつたが、きっと、上総の海岸の周辺のどこかで繁殖しているのに違いないと思つたが、確かめられないでいた。

さて、千葉市の鳥はコアジサシである。千葉市は海岸の砂地に繩を張つて産卵地を保護していた。たまたま、そこで、コアジサシの繁殖の群れや卵を見ることができた。しかし、今はここもハシブトガラス、チヨウゲンボウ、ノネコなどに卵やヒナが襲われ、繁殖は見られなくなった。

かつて、千葉市などで繁殖したのが、秋口に南へ渡るため上総の河口に集まり、大群で見られることがあ

る。これらのことから、今でもきっと、三年前から上総の海岸の埋め立て地で集団繁殖していたとの話も聞いた。これらのことから、今でもきっと、上総の海岸で少數ながら、繁殖しているのは確かだと思った。

コアジサシのオスはメスに求愛するときに餌を与えるので、これらは求愛行動か?と思つた。また、二

鳥は地面の窪みを利用し、巣材は何も使っていない

が、やつてくる。彼らは川面から数メートル上空の一点にとどまり、急降下して小魚をとらえて、下流へ飛び去っていく。そよ風の中で、真っ白な姿を見ると「今年も良い時節になった」とうきうきした気持ちになる。

その数は一~二羽であつたが、きっと、上総の海岸の周辺のどこかで繁殖しているのに違いないと思つたが、確かめられないでいた。

さて、千葉市の鳥はコアジサシである。千葉市は海岸の砂地に繩を張つて産卵地を保護していた。たまたま、そこで、コアジサシの繁殖の群れや卵を見ることができた。しかし、今はここもハシブトガラス、チヨウゲンボウ、ノネコなどに卵やヒナが襲われ、繁殖は見られなくなった。

かつて、千葉市などで繁殖したのが、秋口に南へ渡るため上総の河口に集まり、大群で見られることがあ

かずさの博物誌

コアジサシ

~魚獲りにたけたカモメ~

文・写真／成田篤彦

2011.7.22



▲小魚をくわえて飛び上がるコアジサシ
2011年6月15日=木更津市 筆者撮影

付近で過ごし、上総でも夏鳥として渡来する。彼らは本州、四国、九州で繁殖する唯一のアジサシ類である。河原や裸地で、集団で巣をつくり、巣は地面の窪みを利用し二~三個の卵を産む。砂れき地に産み落とされた卵は地面の色とよく似ており、分かりにくい。また、巣に近づくと頭上をすれすれに飛び、あの鋭いくちばしで刺されたら大きがをすると思ふほどおどされる。

足環を着けた研究から彼らは約八百キロメートルも離れたオーストラリア南東部ビクトリア州やニュージーランド北部で越冬する(山階に頭上を、越えていく。

草地に棲むセツカを撮影に行つたとき、魚をくわえたコアジサシが頻繁に頭上を、越えていく。

橋から海をのぞくと、眼の前でホバリング(停空飛翔)して、一直線にドブンと海に飛び込み、波しぶきをあげ、小魚をくわえて軽々と飛び上がる。小魚を一瞬のうちにくわび去る後を追うと沖合に浮かぶ船着き場に小魚をくわえたまま降りた。そこにはコアジサシが約三千羽いた。

シとはアジ(鰆)を突き刺すようにしてとらえることからきている。飛行の尖った翼があるので、抵抗なく飛んでとらえる技はいつ見ても見事だ。

先の尖った翼があるので、抵抗なく飛んでとらえる技はいつ見ても見事だ。

それが出来るのだと思った。そこから由来した別名が「がんどうしき(強盗鳴)」である。ちなみに、アジサシとはアジ(鰆)を突き刺すようにしてとらえることからきている。飛行の尖った翼があるので、抵抗なく飛んでとらえる技はいつ見ても見事だ。

飛行の尖った翼があるので、抵抗なく飛んでとらえる技はいつ見ても見事だ。



▲裸地で休むコアジサシ
2011年6月20日=木更津市 筆者撮影



◀コアジサシの卵 地面の窪みを利用し、巣材は何も使っていない
2008年6月14日=千葉市 筆者撮影

(主な参考文献) 北川 捷康 1976 「コアジサシ」 静岡県の自然四季の野鳥 静岡新聞社、風信子2008 「俳句と詩歌であるく鳥のくに」 文・総合出版